
ネギまでFATE

石丸

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ネギまでFATE

【Nコード】

N4396Q

【作者名】

石丸

【あらすじ】

神様（笑）の手によって死んでしまった俺は、転生してネギまの世界へ。

いや俺ネギま読んだことねーんだけどなあ…。

とりあえず気を取り直してこれで俺も無双で好き放題のやり放題だぜーなんてことを考えていると、またしても神様（笑）の手によってとんでもないことに。

初投稿です。誤字脱字や文法がひどいと思いますがよろしく願います。

プロローグ1（前書き）

初めまして

初投稿です。

どうか暖かい目で読んでやってください。

プロローグ1

俺の名前は田中太郎、何の変哲もない高校生だ。
趣味はゲームと漫画、最近はインターネットにもハマっている。
少しオタクが入っているがそれ以外は何の変哲もない高校生だ。

今日という日を迎えるまでは…

.....

今日俺は、長年片思いしていた同じクラスの女の子に一世一代の勇気を振り絞ってデートに誘った。

緊張して嘔みまくっていたが、彼女（予定）は苦笑しながら俺の誘いに応じてくれた。

OKしてもらえた俺は上機嫌で鼻歌を歌いながら家路に着いた。

「やったぞ！、これで俺もリア充の仲間入りだ」

家に帰った俺は、帰り道の途中の本屋で買いあさった雑誌でデートスポットを調べながら、来週にやってくる彼女（予定）とのデートプランを考えるとという至福の時を過ごしていた。

ついでにデートコースを考えながら、彼女（予定）と未来について妄想を膨らませていた。

「子供は二人ぐらいがいいな。理想は男の子と女の子の一人ずつ。」

そんな幸福極まりない時間を過ごしていると、唐突に強烈な睡魔が襲いかかってきた。

「またかよ……」

ここ数日前、いまの様に突然睡魔が襲ってくるようになっていた。原因はよくわからない。

最近はその睡魔に負けて、夜更かしもせずに寝ることが多い。

そのおかげでこの数日は朝早く目覚めてしまい、現在更新中だったクラスの最大遅刻回数更新がストップしてしまっている。

……続くようなら病院に行ったほうがいいかもしれないな。

最近これはマズインじゃないかと思いはじめてきた。もしかしたら脳とかに異常が起きているのかもしれない。

そう考えている間にもどんどん眠気が頭を蝕んできている。

「駄目だ、眠い。今日はもう寝よう」

とりあえず今日は寝て明日になったら病院に行こうと決意してベツトにもぐりこんだ。デートまではまだ日にちがあるしゆっくりと考えていこう。そう考えるとそのまま目を閉じる。

どうやら今日はいつにもまして強烈な睡魔が襲ってきているらしく、一気に意識が薄れていった。

そして俺はそのままわずか17年の短い生涯を終えることとなった。

プロローグ1（後書き）

プロローグです。

追記

少し修正しました。

基本、勢いで書いているので後で修正することが多いと思います。

プロローグ2（前書き）

続きます。

プロローグ2

「おい」

遠くから声が聞こえる……

「おーい、起きんか」

急に声が近くなった。なんだ？もう朝か？

「とつくに朝じゃ。さっさと起きんか馬鹿者」

やけしゃがれた声が聞こえる。俺のかーちゃんってこんなに声低かったけ。

それにしてもやけに眠い。基本寝起きは悪い俺だがそれでもこれだけ眠いのは珍しいな。

「うるさいなあ、起きないくらいで馬鹿ないだろ馬鹿は？」

「いいから、さっさと目を開けんかこの馬鹿者が」

「また馬鹿って言った……。はいはい、わかったよ。起きればいいんだろ起きれば」

ったく。今日のかーちゃんはやけに口が悪いな。
しつこいので、仕方なく起き上がって目を開ける。

「ん？どこだここ？」

目を開けると部屋で寝ていたはずなのに、見知らぬ部屋にいた。真っ白い部屋だ。家具も何も置いてない。正方形の部屋。

「ここはわしの部屋じゃ」

後ろから声がしたので振り向く。するとでかい杖を持ったじーさんが俺の後ろ立っていた。

「じーさんの部屋？なんで俺がじーさんの部屋に？」

「うむ、実はお主に話があったのでな。呼び出させてもらった」

呼び出させてもらった？

話があるから俺が寝てる間にここに連れてきたってことか？それっていろいろ問題ある気がするが大丈夫なんだろうか？

てか話があるなら電話とかでいいだろ。話するためわざわざ連れてくるとか無駄に行動力のあるじーさんだな。

「えっと、話し？ですか？とういうかどちら様ですか？」

とういかこのじーさんは誰だ？

俺の記憶にある限りではあったことがないはずだが。多分。俺が忘れてなければ。

「自己紹介が遅れたの。わしは神じゃ」

「……………はい？」

聞き間違えか？今この人自分の事神って言ったような。聞き間違えだよな。

「……あのすいません。もう一度お願いします」

「だからわたしはお主らの言うところで神と呼ばれる存在なのじゃ」

聞き間違いじゃなかった。

どうやらこの人は神様らしい。まあ自称だが。

「……はあ、そうなんですか。」

よくわからないがとりあえず、納得しておこう。

もしかしたら呆けてるのかもしれないしな。ん？なんでじーさん怖い顔してるんだ？

「……お主全然信じとらんじゃろう」

ばれた。以外に洞察力のあるじーさんだな。

「い、いえ！そんなことないですよ。それよりほらっ、その（自称）神様が何か用ですか？」

「……まあよい。さっきも言ったようにお主話があるのじゃ」

「ああ話ですか。なんですか？」

「うむ実はな……」

「実は？」

「お主死んだぞ」

「……………は？」

「だから、お主は死んだのじゃ」

「死んだ？俺がですか？」

「そうじゃ」

「あのー俺普通生きてるんですけど……」

何言ってるんだこの人。俺が死んだとか。現に今俺はここで生きてるのだが。

どうやら本格的に呆けているらしい。……………だからなんで睨んでんだよ。

「いやお主は死んでおるぞ。今のお主は霊体じゃ」

「レイタイ？」

「そうじゃ。いわば幽霊みたいなもんじゃな」

なんか幽霊呼ばわりされた。さっきから自分の事を神って言ったり俺が死んだって言ったりもしかしてこの人めっちゃくちゃばい人なんじゃないどうか……。

「……まだ信じとらんようじゃな」

「いやあさすがにそれを信じろというのは……」

「疑り深いやつじゃの。ほらそんなに信じられんのなら自分のめで確かめてみい」

そういつてどこからともなく手鏡を取り出すとこちらに投げ渡してくる。てか今どこから出した？手品か？

疑問に思いながら鏡で自分の顔を見る。うんいつも通りの俺だ。

「よく見るとおかしなところがあるじゃろ？」

おかしな所？失礼な俺の顔におかしな所なんてないぞ。別にイケメンでもないけど。

「……別にないですけど」

「もっと上じゃ上」

上？まさか俺が寝ている間に額に肉とか書いたんじゃないだろうな。このじーさんならやりかねない気がする。俺の事死人呼ばわりしたし。

そう自分の顔を思いつつよく眺める。やはり特に変わったところは無い。

「ないですよ？」

「だからもっと上じゃ。頭の上」

「頭の上？ってああーーーーー」

「うるさいのう……」

じーさんがなんか言っているがそれどころじゃない。

なぜなら……

俺の頭の上に光る輪っかが浮かんでいたからだ……

プロログ2（後書き）

プロログはつぎで終わる予定。
追記
修正しました。

プロローグ3（前書き）

これでプロローグは終われるはず

プロローグ 3

「つまり、俺は死んでここに来た。そしてこれが頭に着いた。そういうわけですか？」

「そういうわけじゃ」

「で、あなたは神様と……」

「そうじゃ、そうじゃ」

「そして今の俺は霊体で肉体は死んでいると、そういうことですか？」

「そういうことじゃな」

ガン！

「最悪だ。俺死んだのか。なんでこんなタイミングで……」

来週デートだったのに……

そこで、告白して、彼女（予定）といちゃいちゃしたり、らぶらぶしたりする予定だったのに……

最悪だ……。本当に最悪だ。もう死にたい。もう死んじゃってるけど。

「何をブルーになっておるんじゃ？」

「死んだらブルーにもなりますよ……来週は彼女（予定）と初デー

トだったのに……」

「彼女？はて？お主に恋人はいないとデータには書いてあるがのう？」

「昨日デートに誘ったら、OKしてくれたんですよ……」

「それはまだ彼女ではないじゃろう……」

何言ってるんだか。

デートしてくれるってことは、もう彼女になってくれるってことじゃないか……

「いやいやそれは、違うじゃろう」

心を読まないで下さいよ。プライバシーの侵害ですよ。

「いや、一体どういう思考回路しているの気になっての」

それだとまるで俺が、普通の思考回路じゃないみたいですよ。

「いや、そう言ったつもりじゃったんじゃが、伝わらなかったかの……」

というか、しゃべらんか！さっきから、楽しよって」

もう喋る気力も湧かないんですよ……

いいじゃないですか、しゃべらなくても通じているんだし……
膝を抱えてうずくまったまま答える。

「……はあああああああ」

「ふむ。……正直そこまで落ち込むとは、予想外じゃった。すまんかったのう」

別に、あなたが謝らくてもいいですよ。あなたのせいじゃないですし……

「いやあそう言ってくれど助かるわい、まさかあんなに簡単に死んでしまうとは、思わなくてのう」

そうなんですか……ん？今聞き捨てならないことを聞いたような……

「いやあうつかり力加減を間違えてしまったのう、はっはっは」

あの……なんで俺が死んだか聞いていいですか？

「ああ、それはのう、あれじゃ最近夜になると眠くなることが多かったじやろう？あれな、わしがやってたんじゃ。お主が毎晩夜更かしては、遅刻しているので懲らしめてやろうと思ってるのう」

それで……？

「それでのう、今日は普段より強力にかけてみたんじゃ、死ぬギリギリのところまでな」

ピキッ

「ほう？なぜ、そんなことを？」

「うむ、ひさびさに自分の限界に挑戦しようと思ってのう。どこまでぎりぎりにかけられるかという限界に」

「それで、失敗してしまったと」

「そういうことじゃ、いや／＼ほんとすまんかったのう、はっはっはっはっは」

「なるほど。それなら仕方ないですね、はっはっはっはっは」

「うむ仕方ない！はっはっはっはっはっは」

「死ねえー！　！　！　！　！　！　！　！　！　！　！　！」

ビュンツ！！

正拳突きの要領で、目つぶしをする。

「ぎゃあ あああああああああああああああああああ」

二本の指が両目に突き刺さり顔を抑えてのたうち回る神様。
だが俺の怒りはこの程度では収まらない。

「まだまだ――――！！！」

思いつき力を込めて倒れた体に連続で蹴りを叩き込む。主に股間のあたりに。

「ぬおおおおおおおおおおおあお!!!!」

股間を抑えながら、妙な叫び声を上げて悶えるている。

「とどめ——————!!!!!!」

だが、そんなことで容赦する俺じゃない。

思い切り飛び上がりドロップキックを叩き込む。

重力が加わった俺の両足が凄まじい勢いで、鳩尾に突き刺さる。

「ぬわ——————!!!!!!」

妙な叫び声上げて神様は吹っ飛んで、動かなくなった。

.....

「それでどうしてくれんだ」

「どうするとは……?」

神様はガタガタと震えながら答える。

「もちろん生き返らせてくれるんだろうな?」

「そんなの無理じゃ……」

「なんだと!?!」

「ヒィィィ!」

再び正拳突きของ構えをとると、神様が慌てて喋り出した。

「ま、待ってくれ、一度死んでしまった世界に生き返らせるのは無理じゃが、違う世界にならいけるぞい」

「違う世界?」

「そうじゃ違う世界、すなわち異世界じゃ、よくあるじやろ異世界に転生して好き勝手できたりする・・・」

ああ、そういえばそんな小説を某サイトで読んだ気がするな……

「そんなのいいから生き返らせろ。俺来週デートなんだって」

だがおれは、そんなことどうでもいいんだ。

ようやくデートにありつけたんだ。今更あきらめるなんてできない。あきらめるくらいな死んだほうがまだ。

「もう死んどるぞい」

「ああ!」

「いや、なんでもない……」

「異世界なんてどうでもいいよ。早く生き返らせろ」

急かすように言ってみる。

そんな俺を神様は信じられないもの見るような目を見ている。なんだその眼は腹立つなあー。またボコボコにされたいのか。

「……お主正気か？ 転生すれば好きな世界に行って好き放題できるじゃぞ！ いまならわしの加護も付くぞ」

死神の加護なんかいるか。そのひげ引っこ抜くぞ。

「死神ちゃうわ！」

また心を読みやがった。しかも生意気にも反論してきやがった。神様（笑）の分際で

「お、お主言いたい放題じゃな……まあよいわ。今から儂が異世界に転生するこで得られる特典を説明するからよく聞くんじゃぞ」

そういうと神様（笑）は、転生することで得られる能力や楽しみを勝手に説明し始めた……。

……

「……といった感じじゃ。どうじゃ楽しそうじゃろう？」

「まあ、確かに楽しそうであることはわかった。後そのどや顔すげーうざいよ」

話し終わりどや顔で決める神様（笑）。果てしなくうざい。ほんと死ねばいいのに。

「ゴホン！と、とりあえず転生については、わかってもらえたはずじゃ！どうじゃ希望の世界とかあれば受け付けるぞい？お主漫画とかすきじゃっじやろう。遠慮せず言うがいいぞ」

「いや、でもやはり俺には心に決めた人がいるんだ。転生はできない」

俺はあの子に長年片思いしていたんだ。そしてようやくチャンスをつかんだんだ。今更諦めるとかはやっぱりない。

「異世界に行けば、お主が片思いしている子よりかわいい娘もたくさんおるぞい、それにデートもし放題じゃ」

「何言っただ！あの子以上にかわいい子なんてこの世にいるわけないだろ！！それに仮にいたとしても、俺に振り向いてくれなきゃ

意味ないだろ」

俺は十七年間生きてきたが、彼女ができたことない。かわいい女の子に告白されたなんてこともない。ようするにモテないのだ。

「だから違う世界なんじゃって。それにそのお主のモテナさっぷりもわしが何とかしてやるぞい、おなごにモテモテになるようしてやろう」

本当にいるのか？あの子以上にかわいいこが？いやしかし……

「でも俺のタイプの娘がいるかわからないし……」

確かに見た目だけなら俺の彼女（予定）よりかわいい子がいるのかもしれない。だが彼女（予定）のいいところそれだけじゃない。性格もだ。性格もすごくいいのだ。あんな子が、そうそういるとは思えない。

「それも大丈夫じゃ、漫画の世界じゃからの。基本美人で性格のいい子だらけじゃぞ」

「ブスしか出てこない漫画だったらどうすんだよ」

「そこに行かなければいいじゃろが」

「まあ、それはそうだな……」

まあ、それは確かに行かなければいいだけの話だな。

「……うーん」

そこまで言われると行ってもいいような気がしてくるかわいくて性格のいい子がたくさんいる世界か……
でもやっぱなー……

「……うーんでも、俺やっぱり彼女（予定）とのデートが「ええー
ー！ーい！いい加減せんかぁ！」……逆切れですか……」

「過去のいつまでもねちねちと根に持つでないわ！男ならきっぱり
と許すなり、忘れるなりせんか！それをいつまでもぐちぐちと……」

「……………」

こ、こいつ自分で殺しといて逆切れしやがった。まさか、殺された
挙句こんなこと言われるとは……。

さ、さすがの、俺も予想外だったぜ……。

「大体わしはもう凄まじいほどの年寄りじゃぞ。それほど生きれば
間違いの一つや二つ起こすこともあるわい！それをお主は「あー！
はいはい、わかった、わかりましたよ」……むう、そうか？」

ほっとくと、いつまでも喋り続けそうなので無理やり止める。

まだ納得したわけじゃないが、もうこいつに関わりたくなかったの
で異世界に転生させてもらうことにする。ムカつくけど。すげーム
カつくけど。はぁーそれにせつかくの、デートがー

「うむ、ついに決心したのじゃな。してどの世界が望みじゃ？」

どの世界か」

俺が最近読んでる漫画といえば、ナルトにワンピースにドラゴンボール、後ハンターハンターか。どれがいいかな

まあハンターハンターとドラゴンボールはないな。

ドラゴンボールだと神様とか普通に死んでたりするし。それを神様（笑）の力だけで乗り切るのは無理な気がする。何より筋肉ムキムキの野郎ばっかでかわいい子がいないし。

ハンターハンターは世界観がグロイ。漫画を読んでる限りじゃめっちゃくちゃ治安悪そう。あんな所に行ったら三秒で死にそうだ。なので無理。

となると残りは、ナルトとワンピースか。

ワンピースで自然系の悪魔の実をもらって、無双するというのはどうだろう？……うん、いいような気がしてきた。

「ワンピースがいい。それで自然系の悪魔の実をくれ」

「あっすまん、ワンピースは無理じゃ」

「なんでもいいんじゃないかよ！」

さすが、神様（笑）ここまで来て無理とか言い出すとは思わなかった。

「実はのう、先週誤って一人殺してしまって、そいつを送ってしまったのじゃ」

駄目だこいつ……早く……何とかしないと……

てかなんか嫌な予感がするな。この流れで行くとまさか……

「じゃあ、ナルトは？」

「すまんのう、そこは先々週にry」

やっぱりかぁー！！

そうくると思ったよ。てかお前何人殺してんだよ。やっぱり死神じゃねえか！

「死神ちゃうわ！」

「うるさい！なんで死神だけそんな反応すんだよ！てかどこが空いてるんだよ！？」

「ドラゴンボールとかハンターハンターなら空いとるぞい」

「そこは嫌だ！！他にないのか！？」

なんでピンポイントで嫌なとこだけ空いてんだよ！こいつわざと言ってんじゃないか？

「あとは、そうじゃな……あつネギまとかは、どうじゃ？小説とかだと人気だったと思うが」

「あーネギまかり、俺ってネギま読んだことないんだよな」

「いいじゃないかネギまで、大人気じゃぞ」

めんどくさくなってきたのか、急かしてくる神様（笑）。この野郎、他人事だと思って。俺を殺したのはお前なんだぞ！

「ネギまの世界は基本安全じゃぞ、魔法がある以外はこことたいして変わらんぞい」

「いや、魔法とかあるだけで、結構違うだろ」

「それに、正義の魔法使いがたくさんいるから大丈夫じゃ」

「正義の魔法使いって何？すごく弱そうなんだが……」

「いわゆる正義の味方という奴じゃ、そういうのがたくさんいるから安心じゃぞ」

「正義の味方がたくさんいるのかよ……、なんか嫌だな」

エミヤみたいのがいっぱいいるのか？それって逆に危険な気がするんだが……

「まうた、ぐだぐだ悩みおって…男ならスパッと決めんかい、スパッと」

ほんとムカつく奴だなこいつは。

「そんな簡単に決められるか！人生かかってんだぞ！」

この野郎、誰のせいで死んだと思ってんだ！

「じゃが、前に来た奴らはすぐ決めて行っただぞ」

「……………」

おいおいそれでいいのか、前の奴らは……。もう少し慎重になれよ。相手はこんなやつだぞ。

「ネギまはわしの一押しじゃ。かわいい子がたくさんもいて治安も安全。言うことなしじゃろう」

ホントかよ……。すげー心配なんだけど……。これで地獄みたいな場所だったら泣くぞ俺。

でも、まあこんな調子じゃ有名で人気がある所は、大体埋まっちゃてるんだろうな……。しかたない、ここは神様（笑）のいうことを信じることにしよう。すげー不本意だけど……。

「そこまでお勧めならそこでいいよ。あとはもらえる能力のことなんだが……」

問題はここだ。

「なんじゃ？」

「俺、ネギま読んだことないからどういう力があるのとかわからんぞ」

俺はネギまを読んだことがない、だからどういう力があるのかもよくわからん。正義の魔法使いとか言ってたから、魔法とかがあるんだろうが……。魔法って結構いろいろな漫画であるし、全然違ったりするし。

「ああ、それなら気にすることはないぞ。わざわざその世界に合わせる必要はない。お主の好きな漫画やゲームの能力でかまわんぞい」

「ん！マジか！ほんとか？ほんとに何でもいいのか？」

「いいぞい」

「なんだよ！それを早く言ってくれよな」

ならば最近ハマっているゲームのキャラの能力にしておらおう。チートとしても、申し分ないし。

「じゃあFate／stay nightのギルの能力がいい。あれで頼む」

「駄目じゃ」

「だからなんで言ってることをすぐ変えるんだよ！お前は！」

今さっきなんでもいいと言ったばかりなのにすぐこれだ。さすがは神様（笑）。

「てかなんでだよ！いま何でもいいって言っただろ！」

「限度と言うもんがあるじゃろう、第一それではチートではないか」

いや、チートさせてくれんじゃなかったのか……と言い返そうと思ったがどうせ無駄っぽいので仕方なく違う能力を提案してみる。

「じゃあ、アーチャーは？あれならギルほどチートではないだろ」

「それもダメじゃ」

「なんでだよ！」

お前ほんといい加減にしろ。

「男なら武器は一つでいいだろうが。あんな中途半端に使い捨てるのは物のありがたみがわかつとらん証拠じゃ」

なんだその理由！お前の価値観なんてどうでもいいわ！

「じゃあ、セイバーの能力はどうだ？^{エクスカリバー}約束された勝利の剣とかすべ^{ヴァロン}て遠き理想郷を使いたい」

「ふむ、セイバーか……」

おっ今回はいけそうな感じだな。ここで一気畳み掛けよう。

「どうだセイバーならいいだろ。剣一本で戦ってたし、チートの中じゃそこまでチートではないだろ」

自分でも何言ってるのかよくわからんけど勢いで押し切る！

「それに騎士の生き様ってもしかっこいいよな。国のために命を懸けて戦うってことかさ。あんな風に戦ったりするのがかっこよさそうだし。それにセイバーっていや「お主、そんなにセイバーが好きなのか？」……いや、まあ」

話をぶった切られた上に、冷静に返されてなんか恥ずかしくなる。

「ふむ……、そんなにセイバーのことが好きなのか……」

なんかぶつぶつ言いながら、考え込む神様（笑）

「ではセイバーの能力と宝具でいいじゃろう、それならわしも納得じゃ」

どうやら、OKらしい。ようやく決まったよ。あーマジ疲れた。もう二度とこいつとは喋りたくないな。

「じゃあ、さっそく頼む。」

「随分と乗り気じゃの、最初はあんなに渋っておったのに」

お前の相手してるとすげー疲れるから早く行きたいんだよ。

「いいから早く。あっ！あとモテモテの件、くれぐれもよろしく頼むぞ」

あぶねー忘れるとこだった。異世界に行っても、女の子にもてないんじゃない意味がない。

「わかったわかった。しっかりとモテモテになるようにしてやるわい。ちゃんとモテモテにはな。では行くぞい」

そういうと杖を持ちながら何やら呪文のようなものを唱え始めた。すると体の周りが光始める。

「f d s g j d f k b j l j f h l g !」

なんだかよく聞き取れない呪文を唱えると俺の体を包んでいた光が

増す。さらに俺の前に魔法陣のようなものが浮かび上がりそこから黄金の剣と鞘が姿を現した。ここでようやくこいつが神様に見えたわ。正直今までは半信半疑だった。

「後少しでお主はネギまの世界じゃ」

「そうか」

めんどくさいので一言で返す。

「これでお主ともお別れか、もう二度と会うこともあるまい……」

やった！すごくうれしいけど表情には出さないようにする。変に絡まれたらうざいからな。

「……………」

「短い間じゃったがお主はなかなか面白かったぞい。寂しくなるな……」

ならねーよ！むしろせいせいするわ！

「おっそろそろじゃ。準備はよいか？」

「ああやってくれ」

全身を光の膜が包み込まれる。ようやくここをおさらばできる……。

「ああ、そうそう少し与える能力におまけしといてやるぞい。喜べ」

神様（笑）がにやりと笑ってそんなことを言い出した。
なんだろう。すごく嫌な予感がする。あの顔は絶対ろくなこと考
えてない。

「ちよっおまけって一体「ではいくぞい」聞けっ！」

そこまで言ったところで俺の意識はとぎれた。

プロローグ3（後書き）

これようやくプロローグが終わりました。
思いのほか長くなってしまった……

追記

修正しました。

転生初日 状況を把握してみた。(前書き)

続きです。

転生初日 状況を把握してみた。

あれから数か月の時が立った。

今、俺はきれいに整頓された中世の西洋風の部屋の赤ん坊用のベットの中で横になっている。

今の俺の視界に映っている手は小さく未発達だ。どうやら転生は成功したらしい。あのじじいだから少し不安だったのだが。

あと俺の中ではそのままネギまとやらの世界に行く予定だったがどうやら赤ん坊からやり直さなければならぬらしい。

だがまあ赤ん坊になっていたのは別にいいんだ。少し面倒だがまた成長していけばいいだけの話なのだから。

だがどうしても認められない問題が今現在俺の身に降りかかっている。あのじじい、最後の最後でとんでもないことしやがったんだ。

要するに

俺は

女の子に生まれ変わってしまったらしい……

「あぶぶぶわぁー（なぜだぁー……）」

「あらあら、どうしたのかしら」

そうやって喚いていると、近くで椅子に座って本を読んでいた女性が俺をあやす様に抱き上げた。

この人の名前はギネヴィア・ペンドラゴン。どうやら俺の母親らしい。

腰のあたりまで伸びた光輝くようなきれいな金髪に透き通った青い

色の目をした美女だ。優しげで人を安心させるような雰囲気を持っている。年は二十代前半ぐらいといったところ。

「ほらほら、大丈夫よ。ママはここにいますからね」

俺が寂しくて泣いていると勘違いしたのか、抱きながらやさしく頭を撫でてくる。すげー恥ずかしい……。

俺は外見は赤ん坊だが、中身すでに十五を超えている。赤ちゃんプレイは正直勘弁してほしい。いや、まあ今は実際赤ちゃんなんだけどさ……

「……………うー」

恥ずかしくなって黙り込んでしまう。

この数か月、このように俺が現実を認められずに喚いては母親にあやされて恥ずかしくなって黙るという構図が出来上がっている。抱き上げられるとすぐ（恥ずかしくて）大人しくなってしてしまうためか、何かあるとすぐ俺を抱き上げてあやそうとする母親。

そんな感じで母親との羞恥プレイに耐えていると、今度は若い男がドアから入ってきた。

濡れるような黒髪に深い緑色の目した二十代前半ぐらいの男で、片手に鞘に納めた剣を持っている。

線が細く女性のような風貌だが、よく見ると鍛え上げられた体つきをしている。

名前はランスロット・ペンドラゴン、今の俺の父親だ。

なんでも代々騎士の家系らしく、よく自分の家にある修練場で剣術の修行をしている。いまでも修行を終えてきたのだろう。その顔や服には結構な量の汗が滲んでいる。

「あら、お帰りなさい。あなた」

「ああ、ただいま。その子はまたなのかい？」

「そうなの。いったい何が気に入らないのかしら」

「ははは、まあ元気なのはいいことだよ。それに君がそうしている内はおとなしいじゃないか」

「ふふふっそうね。よっぽど甘えん坊さんなのかしら」

「うー（違うー）」

いまだ声帯が発達していないか、うまく喋ることができない。なので唸るしかない俺。

「君ばかり抱いてないで、僕にも抱かせてくれよ」

剣を近く壁に立てかけると俺を見つめてそんなことを言い出す。汗だくなので勘弁してほしい。

「駄目よ。まずはその前にシャワーでも浴びてきて。汗まみれじゃない。」

そうやって母親が近くあったタオルを押し付ける。それを苦笑しながら受け取る父親。

結構尻に敷かれているのかもしれない。

「修行もいいけど、あまり頑張りすぎるのはよくないわよ？」

「それわかってるさ。ただ来週は仕事だからね。調整はしっかりやっておかないと……」

この数か月で両親が話していることを聞くと、どうやら俺の両親は魔法使いと呼ばれる存在らしく、その力で紛争地帯に行き武装集団と戦ったり、怪我人の治療をしたり、偉い人の警護をしたりしているらしい。さすが魔法、万能だな。

魔法があるということは、どうやらここはネギまの世界で間違いないらしい。

しかし、ネギま世界とはいったいどういう世界なのだろう？ ジジイは安全で俺がいた世界によく似ていると言っていたから大丈夫だろうとは思うが。

いやでも、けどあのジジイがいったことだしな…。

やばい、すげー不安になったきた。大丈夫だよな。ほんと頼むぞ。

とりあえずネギまの世界には魔法というものがあるらしい。魔法があるという点や住んでいる家を見る限りでは、中世のヨーロッパをモデルにしたような世界なのかと思ったが、テレビやケータイなどの電子機器を普通に扱っていたりするので以外に近代的な世界なのかもしれない。

まあ、俺としてはその方が文明が発達している方が便利だし、近代的な方が法律とかもしっかりしてそうなので全然かまわないのだが。

アニメとか漫画もあるしな。

ただ両親は基本英語でしゃべっているため、少なくとも日本というわけではなさそうだ。英語を真面目に勉強しておいて本当によかった。じゃなかったらに言ってるか全然わからなかったからな。

他にもアメリカ、イギリス、中国、日本といった聞きなれた国の名前も話していたので、おそらく俺がいた世界にかなり近い世界なのだと思う。

だが、時折聞くメガロなんとかやマホラというのはなんなのだろう？魔法について話している際、聞くのでおそらく魔法に関係のあることなのだろうが、いまはよくわからない。

国や組織の名前なのだろうか？

戦争やら難民やらという物騒な単語も聞いたのでおそらく当たらずとも遠からずといったところだと思うが。

けど俺のいた世界にそんな国はなかったよな？やはり微妙に違う部分あるのだろうか？

あと魔法についても気になるところだ。

俺は魔法を使って戦ったりする漫画やゲームやったりしていたが、魔法はその作品によって全然強さや性質が違う。

ドラクエやFFみたいなみんながみんな同じような魔法を使うようなこともあれば、人によって使う魔法が全然違うこともある。

ないとは、思うがFateでいうような魔法ではないだろう。あんなもの使う人間がたくさんいれば世界はめっちゃくちゃだ。

それに、それだとセイバーの能力でもチートとかできないし。てか

死ぬ。

そういえばセイバーの能力で思い出したが、俺がもらった約束^{エクス}された勝利の剣や、すべて遠き理想郷はどこにいったんだろう？

能力も使える気配は全然ない。まあまだ赤ん坊だからかもそれは仕方ないかもしれない。

今の体じゃ剣を振り回したりはできなしな。きっと成長すれば、いつか自然と身に着いていくんだろう。たぶん。おそらく。あのジジイのことだから、全然信用できないけど……。

まあそれは、いま考えても仕方がない。もう少し大きくなってから考えよう。

そんな感じにいろいろ疑問は尽きないが、やはり一番の疑問というか問題は俺の体のことだ。

赤ん坊のことじゃない、さっきもいったがそれはもういいんだ。

それはさ

なぜ……

なぜ……

なぜ俺が女なんだということだ……

えっ？しつこい？

そんなのしるか！すごく深刻な問題だぞ。

だってこれじゃあ、いくらかわいい子がいてもデートなんかできな

いじゃないか。異世界に行けば、かわいくて性格もいい子がたくさんいてデートもし放題。俺はその言葉を信じたからこそ転生をすることを決意したというのに……

俺は女の子とデートしたいと言ったが、女の子になりたいと言った覚えはないぞ！いくらなんでも女性同士では俺の望むデートはできないだろう。

なぜあのジジイ言葉を信じたんだ、あの時俺……。後悔先に立たずとはこのことか。

くそっ！あのくそじじいめ……。いつか必ず目にもものを見せてやるからな。

そう心に誓いつつ、未練たらしく自分の体を見つめる。未発達で弱い体だ。

今のところ、男女の違いなどは見た目ではわからないがオムツ（赤ん坊なのだろうがない）を交換されるときに（すごい恥ずかしかった）自分の目でも確認したので、俺の性別についてはどうやら間違いはないようだ。

初めて見たときはパニックって大騒ぎになってしまったがそれは仕方ないことだろう。

だって、ついてなかったんだぜ？

十七年間ついていたものがきれいさっぱりなくなってたんだぜ？

そりゃ男として大騒ぎもするよ、うん。

いや、もう元男なんだけどさ……。

とにかくそんな感じで俺は本当に女になってしまったらしい、まことに深刻な事なんだが。

なぜジジイがこんな愚行に及んだのかは、自分の名前を聞いた時点で大体予想が着いた。

まあ両親の名前を聞いた時点でわかっている人もいると思うが。

「仕事熱心のもいいけど、これからはっきりと子供の相手もしてあげてよ。あなたはもう、パパなんだから。そうよねーアルトリアちゃん」

アルトリア・ペンドラゴン
それが今の俺の名前らしい

転生二日目 歩き回ってみた。(前書き)

早朝に投稿

転生二日目 歩き回ってみた。

俺が生まれてから三年の月日が流れた。

俺は一応順調に成長している。やはりというか、俺の金髪に緑色の目をしていた。これはもう確定だろう。

この三年間で、世界のことや魔法のことも多少ではあるがわかってきた。

まず世界のこと

この世界は魔法があること以外は、俺が前にいた世界とあまり変わらないらしい。大まかな歴史や国も、俺が知っている限りではたいして変わらない。

今俺が住んでいる所はイギリスの中のウェールズという国らしい。時代も俺が生きていた時とたいして変わらなかった。

後この世界には魔法世界というこの世界に隣り合わせのように存在する世界があるらしく、前に話していたメガロメセンブリアとはその世界の国の名前だそうだ。

魔法世界か……。いったいどんな場所なのだろう。

そういえば、前に父さんが前に魔法世界にドラゴン退治に行くとか言っていたな。ということから少なくともドラゴンとかがいることはたしかだ。行ってみたい気もするが、危なそうだな。

まあそれはおいおい考えるところ。例えば行くとしてもまだまだ先の事だろうしな。

次は魔法のことだ。

どうやら魔法というのは世界的に広まっている、という訳ではないらしい。魔法は秘匿されているらしく、知っているのは世界的に見ても少数らしい。

実際、俺の両親も俺が喋り始めてからは俺の前ではまったく魔法の話はしなくなった。どうやら、今のところ俺に魔法を教えるつもりはないらしい。

もしかしたらもう少し成長してから教えるつもりなのかもしれない。教えつもりがまったくないのかもしれないが……。

まあ、一応俺は神様（笑）からチート能力をもらえることになっているはずなので、別に教えてもらえなくてもかまわないのだが。

ただ、約束した相手が神様（笑）であるために、本当にもらえるかどうか怪しいところではある。……というかももらえない可能性の方が高いような気がする。

実際三歳になった今でも、能力が使える兆候はまったくない。まだ三歳だからかもしれないが……。大丈夫だよなこれ。ホント、もう神様（笑）とか言わないからマジで頼むぞ。女にされた上にチートなしとか洒落にもならない。

女になってしまったことはこの三年すで諦めかけている。というか開き直っている。

そうだよ、女だからって女の子好きになってはいけないなんて法律はないはずだ。いざとなったら、スウェーデンにでもいけばいいさ。そうだ、大丈夫だ。俺は大丈夫なはずだ……。いや、これ以上この

ことについて考えるのはやめよう。うつ病になってしまふ。やはり考えすぎはよくないな。うん。

とにかくそんな感じで今のところ俺はごく普通の子供として過ごしている。

両親とも、大分打ち解け来たと思う。最初は親とわかっていても大分遠慮していたが、今は普通に親だと思えるようになった。向こうに遠慮がないのでこっちが遠慮してる馬鹿らしくなったというのが主な理由だが。

最近は何も生長してきたためでできることが増えてきた。

この二年間にはつきりいつて退屈だった。絵本や積み木程度しか遊ぶものがないのだ。ゲームがほしいと言ったら父さんに怒られてしまった。

なぜかカルタがあったが母さんとやると全然手加減してくれないので、おもしろくない。手加減されてもおもしろくないけど……。

仕方ないので積み木を積み上げて大きな城を作っていたら崩れて巻き込まれてしまい、それはやっちゃ駄目と母さんに怒られてしまった。一体どうしろと。

時折母さんがままごとのようなことやろうといってくるが、これもありおもしろくない。どちらかというと母さんの方が楽しんでも気がする。

だからできること増えたのは非常にうれしい。

今は自分の家を歩いて回っている。それにしても子供の体は非常に

動きづらい。まだ赤ん坊から子供に成長しただけなので仕方ないのかもしれないが。

今のところ歩き回れるようにはなったが走ったりするのはまだ無理だ。無理に走ろうとすれば走れないことないが、結構な確立で転ぶ。足が短い上に頭が重いからだ。

一度調子に乗って走ってみたら見事にすっころんで、慌てて母さんがこちらに駆け寄って来たことがある。あれはとても痛かった。不本意だが目から涙が出てしまった。子供になっているせいか我慢しようとしてもちよつとした事ですぐに泣いてしまう。

そんなことが何度かあったから、あまりできないことは無理してやらないようにしている。

なので歩くのが遅くてじれったくても走ったりはしない。後ろに母さんもついてきているしな。俺は一人でも大丈夫なのに……。

どうやら俺の母さんは相当過保護らしく俺が何かしようとするたびに心配そうにこちらを見ていたり、俺の気を引いて注意を逸らそうとしてくるする。最近は俺がいろいろ歩き回っているがそのたびについて来たり、抱き上げて連れ戻そうとする。

一度「俺は大丈夫だよ」と言ってみたが、はいはいと聞き流された挙句「俺じゃなくて私でしょ」と言葉づかいについて注意された。三歳児が歩きまわっていたら親として心配なのはわかるけど、少しは俺を信用してほしい。確かに俺はよく転んだりするし、転ぶと大體泣いたりするが中身はもう大人なはずなのだ。

あと家の中を歩き回れるようになって気づいたことだが、俺が住んでいる家はすごく広い。家というより屋敷に近い。

修練場があるとか言っていた時点で小さくはないだろうとは思っていたが、それでも驚くぐらいでかい。
体力がない子供では回りきれない。

今日も、そろそろ疲れてきたな。

「ねえーアルトちゃん、そろそろお部屋に戻ろうよー」

そんな俺の調子を察したのか、母さんが俺を抱き上げて来た道を引き返そうとする。そろそろだっこするには重くなってきたと思うんだけどな……。例の魔法という奴を使っているのかもしれない。

「えーまだ歩きたい」

ホントは歩きたい訳ではないが、部屋に戻っても暇なのだ。

「でもアルトちゃん、もう疲れてきたでしょ」

「ぜんぜん疲れてないよ」

「えーでも疲れた顔してるよ?」

「そんなことないって」

「はいはい、でもお散歩はまた明日ね」

「……………うー」

だめだ、まったく取り合ってもらえない。こういう時は何を言っても無駄なのだ。おかげで最近は唸るという変な癖がついてしまった。

「俺まだ平気だって……」

ぼそりとつぶやくと俺を抱き上げたまま、片手でおでこをつついてきた。

「俺じゃなくて私でしょー、もぉー何回言えばわかるのかしら」

「……………」

母さんは俺の言葉づかいが悪いのがお気に召さないらしく、日頃からよく注意されている。特に自分の事を俺と言うのは駄目らしい。おかげで、最近は少し口調が大人しくなった気がする。

「いーい？、女の子は俺じゃなくて私っていうの、わかる？わ・た・し」

「……………」

「ほらほら、言ってみて私って」

「……………私」

「もう少しにこやかに言ってくれとママうれしいな」

「……………うー」

「ふふふっもしかして怒っちゃた？ごめんねー、アルトちゃん」

そうやっておでこをくつつけてくる。

その後しばらく部屋で母さんが絵本読んでくれた。

前にも「絵本、読んであげるね」と言われたので、「別に自分読めるよ」と言っただが、「えー、そうなの？アルトちゃん頭いいのね」とにこやかに言われた後、何事もなかったかのように「じゃあ、読むよー」と言われた時は「え！？」と思ったなあ。

どうやら俺が自分で読めようが読めまいが、母さんにはあまり関係ないらしい。

そうやって母さんの遊び付き合っていると、修行を終えて父さんが帰ってきた。相変わらず汗だくだ。そんなに鍛えて楽しいのだろうか？俺には理解できない世界だ。

「ギネヴィア、アルト、ただいま」

「あら、お帰りなさい。あなた」

「おかえり」

父さんは剣を壁に立掛けながら、こちらを見る。

「あれ？アルトはまた絵本を読んでもらっているのかい？」

「アルトちゃんは、ママに絵本読んでもらうの好きなんだもんねー」

「いや俺は「私」……私は別に……」

「って、アルトは言ってるけど？」

しっかり見ておいてね。目を離すとすぐどこかに行っちゃうんだから」

そういうと母さんは部屋から出て行った。

「じゃあアルトこっちにおいで」

「えー」

正直、男に抱き上げられるのは好きじゃない。

父さんは女みたいな外見だからまだ我慢できるがあまりうれしくないのは確かだ。

いや別に女性なら抱き上げられたいって訳じゃないよ！勘違いしないでね！

「あれ、これは嫌われちゃったかな？」

苦笑する父さん。このやり取りは毎日しているのであまり気にしてないみたいだ。最初の方は傷ついていたようだが。

「ほら、アルトここに座ってお父さんとお話しよう」

そう言って、ソファーに座りこむと横ポンポンと叩く。さらにもっていたジュースをコップに注ぐ。

「ほら、ジュースもあるよ」

仕方なく横に座る。言っておくが別にジュースにつられたわけではない。

「今日はどうだった？楽しかったかい？」

俺がジュースを飲んでいると、父さんが質問してくる。これもいつもの質問だ。一年ぐらい前から聞いてくるようになった。なぜ毎日聞くんだろう？

「今日も楽しかったよ」

「そうかい。それはよかった」

とてもうれしそうに笑う。父さんは相変わらずよくわからないな。母さんはすごくわかりやすりのに。

「父さんはどうだった？」

「うん、父さんも楽しかったよ」

修行が楽しいのか。変わってるなあ。いつそ聞いてみるか。

「剣を振り回してるのが楽しいの？」

「うーん、なんて言うか父さんはただ剣を振りましている訳じゃないんだよ。うまくいえないけど」

「えー、よくわからないなあ」

「うーん、父さんによくわからないな」

なんだそりゃ？からかっているのかな？

「なんでわからないの？」

「うーん、なんでだろうね。アルトはなんでだと思う？」

「そんなの知らないって」

質問を質問で返すなよ。俺が知るわけないだろ

「そう言わずに考えてみてよ、意外にアルトならわかるかもよ？」

「ええー……」

そう言われたので真面目考えてみるが、やはりありきたりな答えしか浮かばない。

強くなりたいとか？

「うーーん」

悩んでいると、父さんが聞いてくる。

「どうかな？何か思いついたかい？」

「えーっと…強くなりたいから？」

「なるほど、それは確かにあるね」

「えっ当たり？」

意外にあたりか？自分で言っというてなんだが驚きだ。案外単純なの

か？

「でも、それはどちらかというと目的に近いかな。確かに強くなるだけだね」

「じゃあはずれ？」

「うーん……そうだね。はずれだね」

なんだはずれか。

結局、全然わからん。言ってることが難すぎる。

「ははは、まだアルトには難しかったかな」

そう言われると腹が立つな。こう見えてももう二十歳なんだが。それだと、まるで俺が無知みたいじゃないか。

「なんだよ。父さんにもわかんないんだろ」

「そうだね。父さんもまだまだだね」

そういつてまた笑い出す父さん。

だめだこりゃ。

.....

そんな感じで他愛もない話をしていると母さん料理を持って入ってきた。

「おまたせーできたわよー」

「できたみたいだそれじゃごはんにしよう」

「……うん」

食事のときは決まってテンションが低くなる。

テーブルに乗っている料理をみる。うん、いつも通りだ。

本来の食感がわからなくなるほど茹でた野菜、黒くなるまで揚げたよくわからないもの。最初は単に母さんが料理べたなのかと思ったが、どうやらそうでもないらしい。

なんというかつまり、イギリスの料理はあまりおいしくなのだ。

よく言えばシンプル、悪く言えば雑だ。

基本的に適当に料理したあとは、個々で味付けするといった感じだ。元々イギリスに生まれていれば、こんなことは思わなかったのかも知れないが日本食の味を知っている身としてこの料理はあまりにいいだけない。

「さあ召し上がれー」

だが、にこにこ料理を差し出す母さん相手にそんなことを言えるはずもなく

「……いただきます」

今日もまた雑な料理をおなか一杯食べる。

転生二日目 歩き回ってみた。(後書き)

主人公の性格がよくわからなくなってきた。

転生三日目 友達を作ってみた。(前書き)

今日で連休も終わりです。あーあ。

転生三日目 友達を作ってみた。

さら一年たった。

生活自体にそれほど変化はない。平和そのものだ。

ただ相変わらず魔法とは無縁だ。いや両親が魔法使いというだけでも無縁じゃないのかもしれないが。

相変わらず魔法を教えてくれる様子はない。まあ構わないんだけどさ……。

変わったことと言えば、母さんが最近なって妊娠したことだ。どうやら父さんがいろいろ頑張ったらしい。何をとは言わない。

しかし基本的に両親とは一緒に寝ているのだが、いつそんな事をしたのだろう。謎だ。

体も少し成長した。最近は普通に走り回ったりもできる。どうやらドジッ子属性はなくなったようだ。

しかしどんどんセイバーに似てきたな。

今の俺は髪を下したセイバーをちびっこにしたような感じだ。あほ毛も生えてきたし。

母さんもようやく俺のことを認めてくれたらしく、最近は一人で家の中を出歩くことができるようになった。

いまま家の中を探検している。どうやら俺の家は普段は一部の部屋

しか使っていないらしく、埃がひどかったり、ゴキブリ出たりとひどい状態だ。

確かにこの家の全部の部屋を母さん一人で掃除するのは無理だけどさ。まあ月一でお手伝いさん来て掃除していつてくれるしいいか。あたりを見回しながら長い廊下を歩く。

「そろそろこれも飽きてきたな……」

さすがに一年も歩き回っていると、いくら広い家でも見飽きてしまう。まだ昼過ぎだ。

これからどうしようかなと考えながら、窓の外を見る。

日本とは違う街並みが広がっている。

「外に出たいな……」

母さんと一緒に買い物には行ったりするが、いまだに一人で外に出たことはない。言えば公園などに連れて行ってくれるが、さすがにまだ一人で外に出てはいけないらしい。

だが公園に行っても子供しかいないので楽しくない。

前に行ったときは、なぜか他の子供達に異様に絡まれた。髪や服を引っ張られたり、悪口を言われたりした。なぜだ。

最初は我慢していたが、いつまでたってもやめないの、追いかけて回して思いつき蹴りを入れたら、なぜか余計に絡まれるようになってしまった。

子供というのはめんどくさい。理屈も通じないし。

とにかく、そんなことがあったのであまり公園には行きたくない。

「あーいたいた、アルトちゃん」

考えながら窓の外を眺めていると、母さんが向こうから歩いてくる。
どうしたのだろう？

「母さんどうかした？」

「ねえねえ、アルトちゃん今暇？」

暇だな。やることないし。

「まあ暇かな」

「そうなんだー。じゃあさ、ママとお外に行かない？」

そういうと嬉しそう笑う母さん。買い物かな？まあ暇だったし、ち
ょうどいいや。

ついでにお菓子でも買ってもらおう。

「いいよ。買い物？」

「ううん、今日は公園」

「うえっ、公園？」

それなら行くのは嫌だ。

「じゃあ、嫌だ」

「どうしてー？最近全然行っていないじゃない」

「だって楽しくないし」

「えーお友達と遊びたくないの？」

「友達なんていないよ！」

自分で言って悲しくなるが、事実なので仕方がない。

「そんなこと言ってー。この前行った時はあんなに楽しそうにしてたじゃない。」

楽しそう？どこがだよ！。鬱陶しい子供を追い回してただけだぞ。

「楽しくないよ。それにあいつ等、俺の「私」……私の髪の毛とか引っ張ってくるんだ」

「それは、アルトちゃんに構ってもらいからよ。きっと一緒に遊びたいんだわ」

そうかなあ。そんなことない気がするんだが。あいつらは本気で俺を馬鹿にしてる気がする。

「一緒に遊んでるというより一方的に遊ばれてる気がするんだけどなあ……」

「ねえーえ、ママと一緒に公園に行こうよー。アルトちゃん」

「ええー」

んー、やっぱり嫌だな。子供の相手はすごく疲れるんだ。

「お願いー。この前アルトちゃんがほしがってた本、買ってあげるからー」

「……うつ」

「ねー、いいでしょー」

くそっ、さすが母さんだぜ。的確にこちらの弱点をついてきやがる。あっちなみにこの前欲しがっていた本というのは、唯の漫画本だ。ハガレンっっておもしろいよね！

「……うー、わかったよ。でも少しだけだよ。行ったらすぐ帰るから」

「はいはい、じゃあ行こうね♪」

そういうと俺の手を取って歩き出す。はぁーめんどくさ。

.....

今は母さんと公園に向かって歩いている。

「はぁー」

長い溜息を着く。これから事を考えるのは鬱だ。前は子供の事はそんなに嫌いじゃなかったんだけどな。

「なあに？そんなにママと公園に行くのが嫌なの？」

笑ってそんなことを言う。本心から言ってるわけじゃないんだろう。

「母さんじゃなくて、あいつらだよ。お……私別に何もしてないのに」

「いいじゃないの人気者で。あと女の子なのにあいつらとか言わないの」

「うー、そんな人気いらんって」

「ふふふ、あつ、見えてきたわよ」

そんな感じでしゃべっていると、公園についてしまった。はあー。

公園の中でたくさん子供が平地を走り回ったり、砂場でままごとをしたりしている。

俺と母さんが公園に入ると何人かがこちらを見て話し出す。何人かは見たことがあるな。きつと、俺にちよっかい出してきた奴らだな。

俺と母さんはベンチの近くにいる子供たちの保護者の集団に近づいていく。あちらもこっちに気づくと手を振ってくる。

いそいそと近づく母さんと俺。近くまで行くと、一人の女の人が俺と母さんに話しかけてくる。

「こんにちわ、ギネヴィアさん。アルトリアちゃんもこんにちわ」

「こんにちわ、マリーさん。体調はどう？」

「こんにちわ」

「おかげ様で問題ないわ。順調大きくなってるみたい。そちらは？」

「私はまだまだよ。これから大きくなっていくんだろうけど」

この人はマリー・アントワネットさん。ママさんたちの中でも、特に母さんと仲のいい人だ。母さんと同じく妊娠しているらしくおなかも結構大きい。

母さんとは子育てのことでよく話し合ったりしているらしい。ママ友って奴か。

「じゃあママはここにいるから。他の子たちと遊んでいらっしやい」

「んー」

そういつて周りを見る。

そんなこと言われてもな。さっきまで走り回っていた奴らが、明らかにこちら見てそわそわしている。目が合うと慌てて目を逸らすのはつきり言つてバレバレだ。俺が母さんから少しでも離れたら悪戯してくる気だな。

「どうしたの？遊んでこないの？」

「少し疲れたから休んでるよ」

そういつてベンチに座る。時間稼ぎだ。別に疲れてはいないがこれからのために英気を養っておきたい。とういうかあいつらに近づきたくない。どうなるか目に見えてるしな。

「そうなの？ママはおしゃべりしてるけどいい？」

「いいよ。少し休んだら私も遊んでくるから」

「そうかしら。じゃあまたあとでね」

そう言つて他のママさんたちと喋り出す。

俺はどうしようかな。こんなことなら先にマンガを買ってもらっとくべきだった。今更だが後悔。

そうしている間もそわそわしながらこちらの様子を窺っている子供たち。さすがに親の前で悪戯するつもりはないらしい。
しばらくほっとけば諦めないかな？そんなこと願ってみる俺。

その願いが通じたのか徐々に諦めて遊び始める子供たち。まあきつと俺がここを離れたら、すぐにこっちに来るんだろうけど。
しかしまだ何人かはまだこっちの様子を窺っている。さっさとあきらめろよ。ったく。

「ふわあ〜〜」

そんな感じで考えていると眠くなってきた。ここで寝ちゃおうかな。母さんたちがいるから安全だろうし。

「昼寝でもするか」

そういつて横になって目を閉じる。今日は天気がよく気持ちがいい。すぐに意識が遠のいていった。

.....

「.....ねえ」

「くーーーー」

「ねえ」

「くーーーー」

「ねえってば!!」

「うわっ!!」

耳元で大声出されて飛び起きる。ううっ耳がキーンとする。横を見ると1人の少年が立っていた。まったく、なんなんだよ一体。母さんは何してんだ？1人娘が絡まれてるぞ。

あたりを見て母さんを探すとすぐ近くでマリーさんと話していた。夢中になっているようでこっちには全然気づいていない。まあ気づいて何もしてくれないだろうけど。

「ねえ！」

俺が返事をしないのでまた話しかけてくる。

「……なんだよ」

「一緒に遊ぼうよ」

「えー」

そう言ってよく顔を見る。知らない顔だ。新顔か。

「てか誰だ。お前？」

母さんがいないので口調を気にする必要もない。そんな俺の口調に少年は一瞬怯んだものの。すぐに立ちなおって言い返してくる。

「ぼくアレク。ねえ一緒に遊ぼう」

「別にいいよ。それに今忙しい」

「えー！でも今寝てたじゃん」

いちいち大声出すな。うるさいぞ。

「寝るのに忙しいんだよ。あっちいけば他の子がいっぱいいるって」

そう言って再び横になる。

「えー遊ぼうよう！」

「だから嫌だって、いいからあっちいけよ。ほら楽しそうに遊んでるだろ」

向こうで遊んでる子たちを指さす。

「ぼくはきみと遊びたいんだよ！」

「知るか。俺は遊びたくない」

そういつて背を向ける。

「ねえ遊ぼうよ」

またそれか。埒があかないな。面倒になってきたので無視する。ほっとけば諦めるだろ。

「ねえ遊ぼう」

「……………」

「ねえ」

「……………」

「ねえってば！」

ねーねー、うるさいな。仕方ないので両手で耳をふさぐ。

「ねえ」

「……………」

「……僕と遊ぶのやなの？」

「さっきからそう言ってる」

「う、うう、遊ぼうよう、うう」

ちよっ泣くなよ！俺が泣かしたみたいだろ！
しばらく無視していたが、一向に泣き止まない。せめて遠くで泣いてくれよ……。

仕方ないので相手してやる。泣く子と地頭には勝てぬってのは心理だな。

「おい泣くなって、遊んでやるから。な？」

「ううっ、ほんと？遊んでくれる？」

泣きながら確認してくる。あーあー、涙と鼻水で顔がくしゃくしゃだ。汚ねえな。

「ああ遊んでやるから。ほら何するんだ？」

そう言いながら持ってたハンカチで顔を拭いてやる。このハンカチはもう使いたくないな。

「……名前」

「ん？」

「名前、なんていうの？」

「ああ、アルトリア。アルトリア・ペンドラゴンだ」

「……アルトリア。じゃあアルちゃんだね！」

嬉しそうに言う。さっきまで泣いてたのに子供ってのは現金だなあ。そんなに俺に遊んでほしかったのか？

「で何すんだ？アレク」

いきなり呼び捨てだが、子供だし別にいいだろ。

「うん、えーっとね。かくれんぼ！」

「かくれんぼ？二人で？」

「うん」

「……鬼は？」

「じゃんけん！」

はあ~~~~。

こんなでかい公園でかくれんぼかー。しかもふたりで。

「かくれんぼは今度にしないか？二人だしさ」

「僕とかくれんぼやなの？」

また泣きそうな顔する。はいはいやればいいんだろ。やれば。

「わかったわかった。かくれんぼな。やろうやろう」

「うん！じゃあまずじゃんけんだね！」

「はあ、じゃあ行くぞ。じゃーんけん」

「ぽいつ」

はあ、今日は過酷な一日になりそうだ。

買ってもらう本は二冊だな。

.....

「って感じの一日だった。」

「へえー、友達とかくれんぼかー」

今俺は父さんと話している。恒例の奴だ。

「……友達か」

「あれ？違うのかい？」

「……いや、友達かな」

まあ子供でも1人ぐらい友達がいてもいいかな。疲れたけどそこそこ楽しかったし。それに友達1人もいないなんてさびしい人間みたいでいやだ。

「それにしても……」

「ん？」

「言葉づかいは相変わらず悪いみたいだね」

しまったぁー。普通に喋っちゃったよ。

「後で母さんにいっておくね」

「うー」

にっこり笑ってそんなことを言う。悪魔だ……。

「お待たせー。ごはんできたわよー」

狙ったかのようなタイミングで入ってくる母さん。

「ああ、ちょうどよかった。アルトがね「わーーーーー」」

「えー、なにに。アルトちゃんがどうかしたの？」

「うん実はね……」

ああ、どうやら本当に今日は厄日のようだ。

ちなみにじゃんけんには負けた。

転生三日目 友達を作ってみた。(後書き)

あれ、確かネギまのSS書いてたはずなのに。
おかしいな。こんなはずでは。

転生四日目 切れてみた。

「もうそろそろ夏か」

そう言いながらアイスを食べる。だいぶ暑くなってきたな。

今俺は家の庭でアイスを食べながら、のんびりとしている。平和だなー。

あれからは、よく公園に行くようになった。まあ家に引きこもっているよりは楽しいしな。相変わらず絡んでくる馬鹿はいるが最近アレクが追い払ってくれるようになったので楽でいい。

ちなみに今は午前中、今日も午後から行く予定だ。今は午後遊ぶための元気を蓄えているところだ。

「ふうー、今日はアレクと何しようかな」

サッカーとか？でも二人じゃなあ。鬼ごっこは？それも駄目だ。二人だと体力が持たないだろう。

他の奴も混ざってくれればいいのに……。

いつもアレクと遊んでいる奴らは、俺がいると混ざってこない。なんでだろう。嫌われてんのか？

地味に傷つくぞ。別になんもしてないと思うんだがなあ。

ふたりだとやれること少ないんだよ。

「はぁーあ」

そんな感じで、最近癖になりつつある溜息を着いていると母さんが向こうが歩いてきた。

母さんのおなかも大分大きくなった。まだまだ生まれるのは先らしいが。

下の兄弟が生まれるのは少し楽しみである。前世では兄と姉がいたが弟や妹はいなかった。だから新鮮な感覚だ。できれば妹がいいな。かわいい妹がほしい。

「アルトちゃん。ママ買い物に行ってくるけど一緒にいく？」

いつの間にか近くに来ていた母さんが聞いてくる。買い物か。午後は遊びに行く予定だしなあ。

「うーん、今日はいいや」

「そうなのー？残念ねえー」

少しがっかりしたように言う。最近友達ができたせいで母さんという時間が減ったため少しさびしいようだ。

まあそれも子供が生まれるまでの辛抱だろう。俺と違って手がかかるだろうしな。

「まあ、アルトちゃんはアレクくんとのデートがあるしね。仕方ないか」

とんでもないこと言い出した。やめてくれよ。冗談じゃないぞ。

「デ、デ、デートじゃないよー！」

第一デートというのは、その、なんというか、つ、つ、つき合う者同士がすすすることじゃないか。男と付き合う気なんか全然ないぞ。

「ふふふ。アルトちゃんたら真っ赤になっちゃって、かわいいー」

「うー」

またからかわれたようだ。やはり一生勝てそうにないな。

「じゃあ買い物してくるからお留守番しててねー」

そう言って歩いていく母さん。

精神的にやられたので地面に寝転がる。すると青空が視界に入ってくる。キレイだなー。

「これが漫画の世界かー」

最近はそのを忘れてしまうことが多い。今の俺にはまぎれもない現実であるわけだしな。

そーいや漫画の世界なら主人公とかがいるはずだが、一体どこの誰なんだろうか？

魔法世界なんてものがあるくらいだしそっちの方にいるのかもな。

いや日本の漫画だから日本が舞台の可能性も高いな。
まあとりあえずイギリスにはいないだろう。

あと物語であれば敵である存在がいるはずだ。敵が現れれば何か異常な事態が起こるはず。だが以前として世界は平和だ。

魔法の秘匿などもあるし実は人知れず戦っているのかもしれないが、それならそれで構わない。どうせ最後には主人公が勝つんだろうしな。

いやそれ以前にすでに物語が終わった後の世界なのかもしれない。
まだ始まってすらいらない可能性もあるが。

それにあのジジイが安全な世界に送るような奴だとも思えない。間違えて人殺すようなだしな。

言っておくが俺は主人公が近くにいても近づかない。むしろ逃げる。
全力で。

はっきり言ってそんな危険な奴に関わりたとは思わない。痛いのも怖いのも嫌いだ。チート能力とかもらってもそれは自分のために使うつもりだ。

そういえば思い出したが、俺がもらえるはずだった能力や宝具はどうなっているんだろうか？まったく使える気配などないが。

まあ最近はそれもどうでもよくなってきたな。よくよく考えていたら俺は誰かと戦うつもりもないし。

あの時は未知の世界にいくから自分を守るために力が欲しかったが、今は親がいて1人だけだが友達もいる。もう少して弟か妹もできる。

今俺はそれなり幸せだ。もし力をくれるならもうが、今の平穩を失ってまで欲しいとは思わない。

これで女でなければ最高なんだがな……。

あのとき余計なことを言わずにモテモテにだけなりたいたいと言っておけばよかったなあ。そうすればこんなことにはならなかったと思うし。……いや、そんなこともないか。あのジジイは言ったことすら守らないからな。

ある意味じゃ悪魔よりたちの悪い奴だ。実は神様の振りをした魔王かなんかじゃないんだろうか？……不思議だ。そう思うとすごく納得がいく。誰か言われた絶対信じてしまうな。

いや、もうあのジジイのことを考えるのはやめよう。俺は悪魔に殺された上に呪われた。それだけだ。うん。忘れよう。あのジジイことはきれいさっぱり忘れよう。

なあに、なんてことはないさ。世界に一人くらいはかわいくて性格がよくて女の子の俺を好きになってくれる人もいるさ。大丈夫。

もうこれ以上悩むのは馬鹿らしいな。おし！忘れた！俺はすべて忘れたぞ！

これからは過去のことなど忘れて平穩に生きよう。

「さてと」

家に入って時計を見る。そろそろいい時間だ。公園に行こうかな。

プルルルルルル！プルルルルルルル！

そこまで考えたところで電話になった。まだ母さん帰って来てないな。父さんは修練場だろうし……。仕方ないので自分が出る。

「もしもし」

「あーーわしじゃ、わし」

がちゃ！つーつーつー

即座に切る。なんだよ。間違い電話か？俺にこんな知り合いはいないはずだしな。仮にいたとしてももう忘れた。

プルルルルルル！プルルルルルルル！

また鳴り出す。はあ……。

「もしもし」

「いきなり切る奴があるか！この馬鹿者めが」

「……………」

「どうしたんじゃ？何とかいわんか」

「……………」もう二度合わないんじゃないのか？」

確かそんなこと言っていた気がする。

「だから電話したんじやろうが」

こいつ……小学生レベルの屁理屈だぞ……。あ！そうだ！この体のこと問い詰めないと！

「どうかお前！この体はどういうことだ！？」

「お主セイバーが好きと言っていたではないか。それにおまけもあると言ったじやろう」

「別に俺はセイバーになりたい訳じゃない！！それにモテモテはどうしたんだ！？」

「心配せんでもモテモテじゃ、……………男にじゃがな、フヒヒ」

っっっっっ！

ああいえばこう言うな、こいつは。もういい。さっさと終わらせよう。

「もういいわ！それで俺になんか用かよ。このくそじじいが死ね」

「いやなに、お主にいろいろと言いつれてたことがあってのう」

悪口はスルーしやがった。うぜえ。

「なんだよ」

さっさと言ってくれ。早く電話を切りたいんだ。

「ああ実はこのう。転生というのは赤ん坊からやり直すんじゃ。お主には言ってなかったと思ってな」

「今更過ぎるだろ!!!俺が生まれてから何年たったと思ってんだ!!!」

「四年くらいかのう」

普通に返された。この野郎……。

「いやそうじゃなくて!ああ!もうほんとにお前はあー!ー!ー!ー!ー!ー!」

ほんっつとイライラする。もう切っていいよね?この電話。

「そうカリカリするでない。それにまだ話は終わつとらんぞ」

電話越しに心を読まれた。てかまだあるのか。もう勘弁してくれ。

「ああ、えーつと、なんじゃったかのう?まったくお主怒鳴るから忘れてしまったぞい」

お前は人を怒らせる天才だな。すげーと思うよ、その才能。

「ああ、そうじゃった。確かお主が転生した後なの、もう二人ほど、その世界に転生したんじゃ」

「……………は?」

ナニヲイッテルンダコイツ？

「おいしいおいしい、どういふことだそりゃあ！？同じ世界には何人もいけないんじゃないのか！？俺の時はその理由で駄目だっただろ！！」

「うるさいのう、そう怒鳴るでないわ。言われんでもしつかりと説明してやるわい」

なんでそんな偉そうなの！？俺なんか間違ったこと言ってる！？

はあゝゝもうマジ疲れるわ。

「あれから目ぼしい世界は満員になってしまつてのう。いくらか余裕があつたその世界に送つたのじゃ」

「いったいどんだけ殺したんだ。お前……」

素で引くよ。この死神が。

「いやあー、年のせいか最近ミスが多くてのう。世界を管理するのは骨が折れるわい」

笑い声する。こっちは全然笑えねえよ。クソが。

「はぁー、もういい。何言っても無駄だろうからな……。でその二人はどんな奴なんだ」

「何を言っておる。それを言ってしまったては面白くなかう」

「……ほんと使えないのな、お前って」

「お主もほんとに遠慮がなくなったのう……」

「お前相手に遠慮する必要はどこにもないだろ」

「……まあええわ。少しだけじゃが教えてやるわい。転生した一人は原作をまったく知らん奴じゃ、お主と同じじゃな。ちなみに漫画もあまり読まんと言っていた。おかげで転生について教えるのも苦勞したわい……」

そいつも、かわいそうになあ。きっと訳も分からなかったことだろう。もしどこかで会ったら親切にしてやろう……。多分会わないけど。

「それで、もう一人の方は原作を最新刊まで読んでいた奴じゃ。その世界に行けると言ったら大喜びしておったぞ。正常な反応じゃな。」

いや異常だろ。普通の奴はそこで喜ばないだろう。

「そいつとは気が合わなそうだな。まあ、どうせ会うこともないんだろうが」

「ふむ？変な事をいう奴じやのう、原作始まれば会うこともあるじやろうて」

やっぱまだ始まってないのか。原作とやらは。いやこのジジイのいうことだからな。話半分に聞いておこう。

「別に俺は原作に絡む気ないしな」

「ふむ？ならなぜ、お主はチート能力を欲しがったんじや？」

「ああ、あの時はどんな世界かわからなかったからな。自分の身ぐらい守れる力が欲しかっただけだ。それに女じゃ活躍しても女の子にはモテないだろ！だからいまの俺には原作に絡むつもりはまったくない！もうチート能力もいらねえよ！それに舞台もどうせ日本か魔法世界とやらだろ。まるっきり関係ないな」

「ふふふ、ところがのう。主人公は現在ウェールズ在住じやぞ」

「はあ！？なんでだよ！？ピンポイントでおなじ国じゃねえか！！！」
すげー近いじゃねえか。これじゃ案外近くに住んでいたりするかもしれないぞ。主人公が実はご近所さんでした。なんて落ちはいらないからな。

「ふふふ、これでも無関係でいられるかのう？」

「くっ………………チート能力とやらいつ手に入るんだ？あと宝具」

「あれ。さっきいらんとか言ってなかったかのう？」

むかつくううう!! くそおお憎しみで人が殺せたら。

「言いからさっさと教えろよ！」

「それが、人にものを尋ねる態度かのう」

こいつのうざさには際限がないな。くそつたれ。

「……お願いします。教えてください」

「だが断る」

このやろう

「…………ブチっ」

「ん？なんじゃ今の音」「てめえっええええええ！いいから教えろって言ってんだよこのくそじじいがあ！てめーの　ピー　を　ピー　して　ピー　してやんぞ！こらあああああ！！！！大体俺が死んだのだって全部でめーのせいじゃねえか！！！！なんで俺がてめーごときに下手に出なきゃなんねーんだよこのくそじじいが！てかなんなんだよこの体は！頼んでねーんだよくそが。よいいな事をし
てんじゃねえよコラ！てめーは（これ以上先はあまりに汚い言葉のため放送出来ません。）」

.....

「はあ、はあ、はあ、はあ、はあ、はあ、はあ、はあ、はあ、はあ」

叫びすぎて喉が痛い。くそっこれも全部くそジジイのせいだ！

「落ち着いたかの？ ストレスのため過ぎはよくないぞい？」

どの口でそんなこと言いやる。

「……で？俺の能力はいつ手に入んの？」

「実はもうお主は持つとるんじやがのう」

「えっマジで？」

そうやって自分体をまじまじと見る。特に変わった所はないけどな。

「うむしつかりと才能は授けてあるぞ」

「は？才能？」

「うむ」

「才能ってことはつまり努力とかしなきゃいけないってこと？」

「何を言っておる。当たり前じゃろうが」

おいおい唯でくれるじゃなかったのか？

「……なあ、それってもうチートじゃないか？ほとんど俺の努力じゃん」

「何を言っておる。与えた才能は超一流じゃぞ。それにお主の体もゲームの設定通りに作られているはずじゃ。これをチートと言わずしてなんと呼ぶのじゃ」

「……なるほどね。………確かにそれもチートかもな」

なんというかすげー疲れた。今すぐ横になりたい。

「ああ………そういえば宝具は………？」

「それなら、お主の家の物置にしまっておいたわい。お主が強くなればおのずと使えるようになるはずじゃ」

「ああ………そうか………他になんか話しある………？」

「いや、もうな「がちゃ！つーつーつー」

はあ、今日はもう寝よう。アレクには悪いが今日はもう遊ぶ気にはならない。

アレクの家に電話して今日は遊べないこと伝えたと、そのまま部屋に言って横になった。

その後も夜まで起きなかったので両親には風邪でも引いたの？心配されたりしているいろいろ大変だった。

神様。もう二度あのジジイに会うことがありませんように……

転生五日目 修行を初めて見た。(前書き)

一週間に投稿

転生五日目 修行を初めて見た。

あれから数日間現実逃避をしていた俺だが、いつまでもそうしているわけにもいかなかったので現在の状況について一度まとめてみる。

1 今現在原作は始まっていない。ということはこれから何かしらの異常事態が発生する可能性が高い。

2 主人公はウェールズに住んでいるらしい。となると異常事態が発生するならウェールズとなる可能性が高い。

3 そうなると現在ウェールズ在住の俺及び俺の家族が巻き込まれる可能性が高い。

4 チート能力はそれに見合う努力がなければ手に入らないらしい。

5 宝具もある程度強くなれば使えないらしい。

6 俺は弱い。

うん。詰んだなこりゃ。

なんてことを言っている場合じゃない。

とりあえず何かが起こった時のために備えはしておかなければならないだろう。

情報源があのだジイであるため口からのでまかせある可能性もあるが、逆にあのジイだからこそ悪いことに限っては当たりそうな気がする。あいつが正しい知らせをしてきたことなんてないしな。

とりあえず努力しなければならぬのは決まりだろう。結局努力しなければ何も始まらないらしいし。

ただ努力しろと言われてもどうすればいいのかはわからない。父さんのように修行でもしてみるか？

……いや、セイバーは魔力を主力にした戦い方をしていた気がする。ということは魔力を扱えなければならないはず。

つまりまずは魔力を操れるようにならないということか。

幸い俺は魔力の量には恵まれているはずである。あのジイが嘘ついてない限り。

でもいくら俺が天才でもそれは独学で身に着くようなことではないだろう。それに物語が始まるまでどれくらいの猶予があるかもわからない。急がなければ。

「はぁー」

やはり父さんに修行してくれと頼むしかないか……。努力するのは苦手んだけどなあ……。

それに今まで俺に魔法関連のことは全く教えてくれなかったわけだし……。断られなければいいんだが。

「まあ考えていても仕方ない」

そう言いながら俺は父さんという修練場に向かう。とりあえず言うだけ言ってみよう。父さんには修練場には入らないように言われてんだけどな。まあいいか。入るだけだし。

.....

修練場の門が見えてきた。入った事はないので少しわくわくする。実は前から一度入ってみたかったんだよな。

扉を開けて中に入ると中には無数の木剣や案山子の残骸のようなものが散らばっていた。……父さん少しは片付けようぜ。

そのまま進んでいくと父さんが剣を構えていた。目の前には全長二メートルぐらいの巨大な丸太が置いてある。

何をしてるんだろうとみてみると、常人には見えないようなスピードで剣を振り回し、目の前の丸太を一瞬でバラバラに切り分けてしまった。

「ぐくっ」

思わず息をのむ。何だ今の？全然見えなかったんだが。

「そこで何してるんだい」

俺が茫然と見ていると父さんが振り向きざまに声をけてくる
その顔はいつものような笑顔ではなく、何の感情も見えない無表情だった。普段とは違う父さんの迫力にビビる。剣持ってるし。

「……アルト。ここに何のようだい？確か入らないように言っておいたと思うんだけど」

勝手に入ったせいで、父さんにしては珍しく怒っているらしい。普段は怒らないからこそ父さんに怒られるととても怖い。

「あの、お……私、父さんに剣を教えてもらいたくて……」

動揺して尻すぼみになってしまう俺。父さんは俺の言葉を聞いて一瞬驚いた後不思議そうな顔をする。

「……剣を？いきなりどうしたんだい？」

「……あの、実は前から教えてもらいたかったんだけど……そのなかなか言い出せなくて……」

本当のことなど話せるわけないので適当な理由を言う。しどろもどろだが。

「……………」

なにやら考え込む父さん。魔法とかがあるし悩んでるのかな？

「アルト。少し考える時間をくれないかな。それは僕だけでは決められない」

「え？あ、うんいいけど……」

いつになく真面目な父さん。

……もしかして俺はとんでもないことを言ってしまったんだろうか。大丈夫だよな。俺は天才のはずだし。

「とりあえずその話は夜にでもしようか。今日は早く帰ってきてくれるかい」

「わ、わかった」

どうやら一応考えてはもらえるらしい。断られなかっただけかもしれません。とおこう。でも断られた時はどうしようかな。まあその時はその時か。そう思い俺は修練場を後にした。

「後は宝具でも見に行くか」

修練場から出た後は宝具を見に物置に向かうことにする。あの電話があった次の日に確かめてみたら物置に今まではなかったはず剣が地面突き刺さっており、その下には鞘が並べてあった。

一応試してみたがやはり剣は抜けなかった。鞘も同じ。まあ今抜けても困るんだけどな。成長止まっちゃうし。

一生幼女のままなんて絶対嫌だ。

それに扱いにも困った。いきなりこんなものが物置に現れたら大騒ぎになってしまう。だが幸いな事にそこは普段はあまり使っていない部屋だったので両親にもばれることはなかった。まあお手伝いさんが掃除しようと物置に入ったときは焦ったけど。

物置に着いたので宝具を確認する。すると鞘の近くに紙切れが落ちていて、ことに気が付いた。

「なんだこれ？」

手紙みたいだ。開いてみるとそこにはこう書かれてあった。

神様より

お主がわしの言ったことを忘れてしまったり、うまく理解できていなかった時のためにこの手紙を残しておく。

まずは宝具についてじゃ

宝具はお主が扱えるようになって初めて他者にも認識できるようになる。ちなみに約束エクスカリバーされた勝利の剣を抜けるようになれば、全て遠アザき理想郷や風王結界インビジブルエアも使えるようになるのでそこそこは心配ないぞい。ただ一度抜いてしまうと成長が止まってしまうので要注意じゃ。

次は能力についてじゃな。

一応お主は超一流になれるだけの才能は持っている。ただしあくまで才能なので勘違いしないようにの。種に水をやらねば芽が出んように、努力しなければ才能は開花せんぞ。強くなりたければしっかりと努力することじゃ。

あとお主はセイバーと同じく竜の因子を持っているために人間の範疇を超えた膨大な魔力と強力な魔力対抗を持っている。それに血液めぐらせ呼吸をするだけで魔力を回復するというおまけつきじゃ。ただお主はそのため竜属性を持っているのでそこは気を付けるように。よいな。

最後にしっかりとわしに感謝するように。

以上

……妙なところで親切な奴だ。絶対感謝なんかしてやらないけど。

しかし竜の因子か。そんなものを俺は持っているのか。感覚的には前と変わらないから自分じゃ全然わからないな。速く使いこなせるように頑張ろう。

[illegible]

さてとじゃあ時間も空いたし公園に遊びにでも行くか。母さんに公園に行きたいを伝えて連れて行ってもらおう。

家を出て、しばらく歩くと公園に着く。

母さんと俺が入るとアレクがこちらに気づいて走ってくる。相変わらずアレクの周りにいた奴らは近づいてこない。さっきまで遊んでたのになぁ。

「久しぶり！アルちゃん」

「ああ久しぶり」

「あらあら、仲がいいわね」

母さんがこっちを見て嬉しそうに笑う。絶対勘違いしてんなこりや。言っても聞かないんだろうけどさ。

「じゃあママは向こうにいるからね」

「うんわかった」

そう言うとも母さん向こうにいる保護者の集団に交じっていった。

「ねえ今日は何しよっか？」

何しようか。二人だけだしなあ……。もう少し人数がいればいろいろできるんだが。

「なあ、それなんだけどさ」

「うん？」

「二人だけだとあれだし、少し人数増やさないか？」

「僕はいいけど。誰かいるの？」

「ほら、さっきお前が遊んでた奴らとかさ」

そう言ってさっきまでアレクと遊んでた連中を指さす。

「んーみんなアルちゃんの事怖がってるからなあ」

「は？なんで？」

あいつらにはなんもしてないぞ。多分。

「だってアルちゃんって女の子なのに口が悪いし、男の子とかも普通に泣かすし、僕に負けるとすぐ怒るし……」

「いや……。それは……」

俺は中身が男だから口調は仕方ないし、泣かした連中にしてもそれは俺にちよっかい出してくるからだ。それに負けても怒ってるわけじゃない。ただ子供に負けたのが少し悔しいだけだ。大人して。

「い、いいから呼んできてくれよ」

「いいけど泣かしたりしちゃだめだよ？」

「別に泣かしたりしないって」

「ほんとかなあ……。僕も何回も泣かされたしなあ」

「そ、それはお前が男のくせにメソメソしてるからだろ」

今でこそ俺の教育のおかげでめったに泣かなくなったが、最初の頃のこいつの泣き虫ぶりときたらひどいものだった。転んだら泣くわ。負けたら泣くわ。叩いたら泣くわ。

「まあいいや。じゃあ呼んでくるからちょっと待ってて」

そう言うとききまで遊んでたやつらの方に走っていく。しばらく話し込んでいたが、やがてこっちに向かって歩いてくる。全員顔が微妙に引き攣ってる。失礼な奴らだな。怖い先輩に呼び出しでも食らってしまった後輩のような顔してるぞ。

「来たよ。おまたせ」

アレクがそう言う。

他の奴らは俺がそんなに怖いのか、こちら来ても全員黙ったままだ。まあ仕方ない。ここは俺から歩み寄ってやらなければな。俺は努めて怖がらせないよう気を遣いながら笑顔で自己紹介する。

「初めまして。アルトリア・ペンドラゴンです。よろしく」

そう言うてにつこりとほほ笑む。これなら大丈夫だろう。

案の定、俺の笑顔が効いたのか全員次第に表情が柔らかくなっていく。今ので少しは緊張が解けたのかぽつぽつとだが自己紹介をしてくる。とりあえずはオッケーらしい。よかった。よかった。

ただアレクだけはそんな俺を信じられないものでも見るように見えていた。あとで泣かす。

.....

「アルトちゃんそろそろ帰るわよー」

「あ、うんわかった」

どうやらいつの間にか夕方になっていたらしい。気が付かなかった。

あのあと途中までは俺も大人しくしながら遊んでいたのだが、いつもちよっかい出してくる奴らが現れたため思わず切れて泣かしてしまい再び怖がられるようになってしまった。アレクスのフォローのおかげで何とか打ち解けられたものの、あの時は本当に困ったぜ。

そんな感じでひと悶着あったものの、どうやら一応は俺のことも友達だと思ってくれたらしい。

「それじゃ今日は帰るよ。またな」

「うん、じゃあさよならーまたねーアルちゃん」

「さよならー」

「ばいばい」

「またねー」

アレク以外にも挨拶してくれた。地味にうれしい。

俺はそういうやり取りを交わした後、母さんと共に公園を出た。家に向かう道中母さんが俺に話しかけてきた。

「今日はたくさんのお友達と遊んでみたいね」

「ああ、うん」

「いつもアレク君と二人だけだからママ驚いちゃった」

いつもより嬉しそうな母さん。

「でもよかったわ。アルトちゃん結構人見知りだから友達があまりできないんじゃないかって心配してたの」

「いや、私は別に……」

人見知りというわけじゃないんだがなあ。まあ喜んでるみたいだしいいか。

「でもアレク君と二人きりになれなくて寂しいんじゃないの」

またこんなこと言い出した。

「ただいま。どうしたの？そんな顔して」

母さんの指摘でようやく苦笑する父さん。自分でも気づいていなかった感じた。

「ちょっとね。少し話があるんだけどいいかな」

「……それは今じゃないと駄目なの？」

そんな父さんの様子に何か感じたのだろう。僅かに声を低くする母さん。

「できれば今がいいね。疲れてるところ悪いんだけど」

「……わかったわ」

「悪いね。アルトは部屋に戻っててくれるかい？」

「わかった」

何やら深刻な雰囲気だ。とても口を挟める雰囲気じゃない。

俺が部屋に戻ってからしばらくすると母さんと父さんが一緒に戻ってきた。母さんは心なしか疲れた顔をしている気がする。だが俺と目が合うと顔を明るくさせる。

「ごめんね、ご飯にしようか。今作ってくるから待っててね」

「あつ、うん……」

そういうや否やさつさと部屋から出て行ってしまう。

「あの、父さん？」

そんな様子に思わず父さんに話しかける。

「話はご飯が食べ終わってからにしよう」

「うん……」

•

しばらくすると母さんが料理を持ってきて食事になった。

「……………」

「……………」

「……………」

空気が重い……。誰も喋ろうとしない。いつもはやかましいぐらい喋る母さんも何やら考え込んでいるようで、さっきからまったく喋らない。

父さんも朝と同じ仏頂面で黙々とご飯を食べている。

どうすればいいのこれ。

さっき父さん達が話していたことは十中八九朝俺が父さんに頼んだことだろう。そんなに深刻な事なのか。軽い気持ちで言ってしまったこと今更ながら後悔する。

皆も黙々と食べていたせいかすぐ食べ終わってしまった。

ここでもうやく母さんが口を開いた。

「アルトちゃん」

「なに？」

「さっきお父さん訊いたんだけど剣術の稽古したいって言ったの？」

「……うん」

「……そう」

また黙り込んでしまう。今度は父さんが口を開く

「アルト。実は父さん達アルトに言ってなかったことがあるんだ」
きた！魔法の事か！

「言ってなかったこと？」

顔に出さないように気を付けながら訊き返す。

「ああ、実はね。父さんたち魔法使いなんだ」

「信じられないかもしれないけど、本当のことなの」

すでに知っているのどうリアクションとればいいのかわからず黙っている、母さんは俺が驚いて声も出ないと勘違いしたらしい。

「えー……あのー……」

こんな時はなんて言えばいいんだ？そんなことを考えていると父さんがとんでもない言い出した。

「まあアルトもうすすす勘付いていたようだけどね」

「ええっ！！」

これは素で驚いた。ええっなんで気づかれてんの！？俺の演技は完璧だったはずだが。

信じられないことだがどうやら見透かされていたらしい。

「あらやっぱりそうなの」

「ええええっ!!」

またまた驚く。母さんまで!! 何それ! さっき信じられないかもしれないとか言ってたのはなんだったんだ!

「な、なんで?」

激しく動揺する俺。

「アルトをわかりやすいからね。見てればわかるよ。この前だって母さんがここで魔道書読んでたのに、気にもしてなかったしね」

そういうばそんなものを読んだたな。確かに全然気にしてなかったけど、それだけで気づくか? ふっ!

「い、いつから?」

「うーん3歳ぐらいからかな。確信したのはさっきの反応だけだね」

「ええええええええええええええええっ!」

結構前から気づかれてたのか……。

「驚きすぎだよ」

いや驚くって!! 普通驚くから!!

「それよりも続きを話したいんだけどいいかな」

「それよりって……」

「僕から剣術を学びたいということは魔法についても学びたいってことでいいのかな」

「う、うん」

そこまで意図して言ったわけじゃないんだけど。

俺がそう答えると父さんたち再び真面目な顔になる。

「アルトがどれくらい魔法に気づいていたかは知らないけど、それはしっかり考えたことなのかい？」

「……うん」

「……そうかい。じゃあまずは魔法について詳しく教えることからだね」

「アルトちゃん。今から魔法ことについて説明するからよく聞いてね」

そういうと父さん達は魔法ことについて一から喋り始めた……。

転生五日目 修行を初めて見た。(後書き)

時間がなくて一気に書いたのでいろいろおかしいかもしれない。
後で修正するかも。

転生六日目 修行開始（前書き）

久しぶりの更新です。

転生六日目 修行開始

父さんと母さんに魔法について説明された次の日、俺は父さんと一緒に修練場に来ていた。今日から本格的に剣術を押してくれらしい。

昨日はあの後に父さんたちにはいろんなことを教わった。

魔法の事。魔法世界の事。まだいろいろと話してないことあるようだが、それもおいおい教えてくれるとのことだ。

そこまで話した上でもう一度に俺に魔法を教えてもらいたいかな尋ねてきた。おそらくこれは真面目に答えると所なのだと思います、俯いてしばらく考えるふりをした上でそれでも教えてほしいと言っておいた。顔を上げたときに苦笑されていたから、ばれていたかもしれないけど。

とにかくそういう訳で今俺は父さんと一緒に修練場にいるということだ。

「じゃあそろそろ始めるけどいいかい？」

「うんいいよ」

何やら準備をしていた父さんが戻ってきたようだ。

「うん、じゃあまずは軽い魔法から練習していこうか」

「魔法？」

俺はどちらかと言うと剣術を教えてほしいのだが……。魔法の才能

はあるかわかんないし。

「そう魔法。アルトはまず魔力の扱いを覚えた方がいい。今の体じや剣を振り回そうとしても、逆に振り回されてしまうのが落ちだよ。それならまずは軽く魔力の扱いについて学んでいって魔法を扱えるようにする。魔法が使えるようになれば体を強化することもできるし、そうすれば剣を振っても自分が振り回されることもなくなる。」

剣の稽古はそれからだね」

なるほど。

そう言われれば確かにそうだな。今の俺の身体能力は同世代の子供比べても低い方だろう。走っていてもアレクなんかには追い抜かされるし。

「じゃあまず魔法のお手本を見せるから、よく見てるんだよ」

そういうと父さんはポケットから先っぽに星が付いた小さい杖を取り出した。

「プラクテ・ビギナル・アールデスカット」

そう唱えて杖をくると回転させる。すると杖の先端にポツという音と共に小さな灯がともった。

「おおー」

これが魔法かすげー。これが出来れば手品師とかで食っていけそうだな。

俺が生まれた見る初魔法に感動していると、父さん「はい」と言つて杖を手渡してきた。

「じゃあ今やったようにやってみて」

「やってみてって今のを？」

「うん」

「やりかたよくわかんないんだけど……」

「だから今やったことをすればいいんだよ」

そんないきなりやってみてって言われても……。

……とりあえずさっき父さんがやっていたように杖を振ってみる。

「プラクテ・ビギナル・アールデスカット」

……しーん

「……………」

「ふふっ」

なんか笑われた！真面目にやったのに笑うとか恥ずかしいじゃないか！

「いや、まあ最初からできるとは思っていないよ。まずは今のをひたすら練習だね。ふふっ」

笑いながら言っても全然説得力ないぞ、父さん。

「練習ってこれをずっと繰り返すの？」

今のままじゃ何度やってもできる気がしないんだが……。

「そうだよ。今のが初心者用の魔法だからね。それができないと始まらないよ。感覚を掴めるようになるまでは繰り返すしかないね」

「……頑張ってみる」

・
・
・
・
・
・
・
・
・
・
・

「プラクテ・ビギナル・アールデスカット」

……しーん

「プラクテ・ビギナル・アールデスカット」

……しーん

「プラクテ・ビギナル・アールデスカット」

……しーん

「できない……」

あれから数日たった。毎日のように練習しているが全然できるようにならない。

なんとなくそろそろできそうな気がするんだけどな。

というか俺は天才のはずなんだが、なんでできるようにならないんだ？てかこれは一体どれくらいでできるようになるものなんだろう
か？

「いったい何が足りないんだろう」

基本的に魔力も才能も十分にあるはずである。……まさか俺に上げた才能も全部ウソでしたくなんて話じゃないだろうな。さすがにここまでできてそれはないぞ。

「もう少しでできそうな気がするんだが」

あと一歩何かが足りない気がする。それが掴めればきっとこれはできるようになると思う。なぜだがわからんが直感的にそう思う。これが例の直感って奴か？

「想像力とかかな？」

よく魔法とかで言うイメージが足りなのかもしれない。……よくイメージしてやってみるか。

火が燃え盛るさまをよく想像する。おし！この状態のまま……。

「プラクテ」

ごんごんごんごんごんごんごん……

なんだか体の周りを何かが渦巻いている気がする。もしかしてこれが魔力って奴か？

「ビギナル」

ごんごんごんごんごんごんごん……

これはイケる！！そう確信した俺は力強く呪文を唱えた。

「アールデスカット！！」

.....
しーん

「イラっ」

できないのかよ!! いったいどうすればできんだこれ! イライラしながら杖を振り回していると

ポッ

「えっ?」

できてしまった。

.....

「父さん。一応できたよ」

妙なタイミングができた事には変わらない。そう自分に言い聞かせながら、相変わらず汗だくで剣を振り回している父さんに話しかける。

「もうできたのかい？」

俺ができたことを伝えたと少し驚いたような表情をする父さん。もう？てことは結構早い方なのか？

「思ったより早かったね。で魔法を使う感覚は掴めたかな？」

「うーんまあ一応は」

「じゃあ次は身体強化だね。さっそくやって見ようか」

「おお」

それが出来れば剣術の練習という訳か。なんかやる気出てきた！

「じゃあ今から教えるからしっかり聞いておくんだよ」

「うん、わかった」

「じゃあ、まずは……………」

・
・
・
・
・
・
・
・
・
・
・

「うぐぐぐぐぐぐ」

「そうそうその調子だ。アルト」

体中に渦巻く魔力を肉体にため込み練り上げる。そして徐々に組み

上げた術式へと魔力を流し込んでいく。魔力が体に流れていくにつれて少しずつ体が軽くそして強靱になっていくのがわかる。

よし！この調子で……………

ボシウウウウウウウウウウ！

「…………ああー」

さらに魔力を流し込もうとした所で、体にため込んだ魔力が勢いよく噴き出していく。体にみなぎっていた力もなくなってしまう。また失敗だ。

父さんに教わってから既に二週間程度の時間がたった。しかし未だにこの魔法は習得できていない。

どうやら俺は体に魔力をため込むと噴き出してしまうという変な癖がついてしまっているらしく、体に魔力を流し込むことで発動するこの魔法はいまだに成功していない。

「なんでそうなっちゃうんだろうね」

近くで見えていた父さんが声を上げる。どうやらこれは父さんでもお手上げらしい。

「うう、また失敗した」

「うーん、なんでわざわざ外に出しちゃうんだろうなあ。普通は出そうとしなければ出て行かないはずなんだけど」

全然そんなことはないんだが。むしろ体にとめておく方が難しい。体に魔力を溜めておくと新しく流れてくる魔力に押し出されそうになって大変だ。

「しかしよくそんなに魔力噴き出して魔力切れを起こさないね。もともと魔力は多いとは思っていたけど」

「魔力はすぐ回復するから別に問題ないよ。むしろその新しくできた魔力に圧迫されるのが問題だよ」

「……回復？新しくできた魔力？」

ん？なんでそこに突っ込んでくる？

「うん、魔力って使うとすぐ新しいのが流れてくるから、ため込んだ方が押し出されちゃうんだよ」

俺がそう言い返すと難しそうな顔をして聞き返してきた。

「……ええーっと、それはつまり使ったが魔力がすぐに回復するってことかい？」

「えっ？うん、そうだけど？」

俺は竜の因子とかいうのを持ってるからな。実はFATEは詳しくないからよくわかんないけど。

……ってそうだ！それが普通の感覚で喋ってたけど、よく考えたらそれって全然普通じゃないんじゃないか？
やばいと思って父さんの方を見ると

「……アルトは一回いろいろと調べた方がいいかもしれないね」

案の定心配そうな顔をした父さんがそこにいた。

転生六日目 修行開始（後書き）

色々あってやる気を失ってました。もし更新するのを待っていてくれた方がいたら申し訳ありませんでした。

次はなるべく早く更新するようにしますので。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4396q/>

ネギまでFATE

2011年5月9日19時17分発行